

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 6章3～11節

³それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。⁴わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。⁵もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。⁶わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。⁷死んだ者は、罪から解放されています。⁸わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。⁹そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。¹⁰キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。¹¹このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書 16章1～8節

¹安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。²そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。³彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。⁴ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。⁵墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座しているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。⁶若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。⁷さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と。」⁸婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

「あの方は、あなたがたより先に」【こども説教のために】

イースターの朝を迎えました。主のご復活おめでとうございます。

今日の朝は、昨日までとはどこか違います。新しい朝を迎えたのです。主イエスがご復活なさった朝です。暗い墓穴の中で迎えた朝ではありません。縛られて、ひどい言葉を投げかけられる中で迎えた朝でもありません。静かな、それでいて輝く光が眩しい、新しい朝を迎えたのです。この朝に、主イエスは、ご復活なさいました。

ほんの数日前、主イエスは十字架につけられたのです。十字架の上で死なれたのです。そこから降ろされて、墓に葬られたのです。墓の中に横たえられているはずでした。十字架につけられた主イエスの御体は、傷だらけだったでしょう。**週の初めの日の朝ごく早く**、つまり日曜日の早朝に、女の弟子たちは、その傷だらけの主イエスの御体が納められている墓に向かいました。死んでしまわれた主イエスの御体に、せめて油を塗り、香料を置いて差し上げたかったのです。死なれたお方の平安を祈りたかったのです。

どんな墓も、入り口は閉ざされています。主イエスの御体が納められた墓は、岩を掘って作った墓（マルコ 15:46）でした。御体が納められた後、墓の入り口には石を転がしていました。石で入り口を塞いでいたのです。主イエスの御体に油を塗り、香料を置くためには、**墓の入り口から…石を転がして**やらなければなりません。小さな石ではなかったでしょう。御体をお納めする墓の入り口ですから、人の体ほどの大きさの石だったのかもしれませんが。簡単に転がせる大きさではなかったのです。女の弟子たちは、自分たちだけで石を転がすのは難しいと思っていました。だれか手伝ってくれる人が近くにいないかと捜していたのでしょう。けれども、心配は無用でした。墓に行ってみると、入り口を塞いでいた石は、すでに転がしてあったのです。

墓の中に入ってみると、そこに誰かがいるのが分かりました。**白い長い衣を着た若者**でした。その若者は言うのです、「あなたがたの捜している主イエスは、復活なかって、ここにはいらっしやらない」と。「**御覧なさい**」と言われてみると、確かにそこに主イエスの御体は見当たらなかったのです。

若者は続けて言いました、「**さあ、行って、弟子たち…に告げなさい**」と。「あのお方は、弟子たちより先に行かれて、そこでお会いくださる」と。

ご復活された主イエスは、わたしたちの行くところに、先においでになられています。そこでお会いくださいます。今日、ここに來た者とお会いくださったご復活の主は、明日、それぞれの者の行くところでもお会いくださるのです。

「十字架につけられたイエス」を捜さない

主のご復活を祝う教会に共に集うことが許されるのは、何と幸いなことかと思えます。十字架を目指して行かれた主イエスを、今はもう、捜さなくてよいのです。この日、わたしたちが見ているのは、すべてが新しくされるといふ希望の現実です。

今年も、共にご復活を祝うことの許された皆さんと喜びを分かち合うために、奉仕者がイースターエッグを準備してくださいました。イースターの飾りつけをしてくださった方もあります。わたしも飾りつけと一緒にいたしましたが、ちょっとしたハプニングがありました。例年飾っている装飾用のイースターエッグが見つからなかったのです。昨年、わたしが片づけをして一つの箱に納めたのです。その箱がどうしても見つからなくて、皆で会堂中を捜しました。結局、そのときは見つからなかったのです。「今年は、イースターエッグの装飾はしないように、ということなのか」と、ほとんど諦めかけていましたが、諦めの悪いわたしは、夜中になって、どうしても気になっていたところを捜してみることにしたのです。すると、見つかったのです。「あそこには無いはず」と、横着して動かさずにいた物を動かしてみたら、その奥にあったのです。

イースターエッグの飾りが見つからないままパソコンに向かって作業をしていたときに、インターネット上である記事が流れてきました。「わたしたちの救いは、イースターエッグやそれを運んでくるウサギにあるのではない。ご復活されたキリストにあるのだ」と。確かに、そのとおりです。タマゴやウサギは、ご復活の話の中には出てきません。ヨーロッパの春祭りの習慣から入ってきた添え物です。けれども、わたしは、貴い添え物だと思います。イースターエッグやそれを運んでくるウサギの描かれた絵を見て、わたしたちは、確かにご復活から始まる新しいことに思いを向けさせられるのです。

3月にわたしたちの教会から送り出した伝道者は、今日から遣わされた教会で伝道者としての新しい働きを始められていることでしょう。入れ替わりのように、わたしたちの教会に時折おいでくださる近所にお住いの他教派の信者が、この4月から神学校に入学されたとの報告をいただきました。新しいことの始まりを、主のご復活を祝うイースターから始められるのは、幸いなことです。振り返ってみて、ちょうど30年前、わたしが神学校に入学した年も、4月の最初の日曜日がイースターでした。それまで自分がしがみついていたことを手放し、捨てて、一年前までは想像さえしなかった神学生としての歩みを始めるには、まさにふさわしいことだったように思われます。

キリストと共に

ご復活の祝いは、古い自分を捨てるということが許されているという喜びを与えられるときです。「もう、振り返らなくてよい」と、ご復活を告げる者は、言ってくれているのです。

もちろん、わたしたちは、古い自分を無かったことにするわけではありません。古い自分に縛られなくなるのです。過去の自分に縛られて身動きできなくなることが、人にはあります。犯した過ちや失敗に縛られるだけでなく、自分の経験や知識に縛られて、新しいことへと踏み出せなくなることが、少なくないのです。そのような古い自分は、キリスト共に十字架につけられてしまったと、使徒パウロは教えてくれています。そして、キリスト共に死んだのなら、キリスト共に生きることにもなる、と教えてくれています。あの、主イエスの御体が納められていたはずの墓の中で、**白い長い衣を着た若者**も、「あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが…ここにはおられない」と告げていたのです、「**あのお方は復活なさったのだ**」と。

この日を迎えるために過ごした「受難節」のただ中で、わたしたちは、またもや新たな戦争が起こされたことを目の当たりにしました。キリスト者やユダヤ教徒を自称する者たちが、神の名を騙って遂行している戦争です。そのことに憤りを覚えている方も少なくないでしょう。なぜ、よりもよって、この期節なのかとも思います。ところが、ある専門家によると、世界中で起こされてきた戦争の多くが、この時期に始められたともいうのです。この期節は、世界の悪や罪が顕わにされなければならないときなのでしょうか。

しかし、わたしたちが導かれてきたのは、そのような世界の悪や罪、あるいは他者の過ちや失敗を指摘し、糾弾することではありません。まさにそのような悪や罪、過ちや失敗は、わたしたち一人ひとりの中に根深く巣食っている病根のようなものなのです。だからこそ、わたしたちは、主のご復活の祝いへと導かれてきた者として、ますます世界の救いを願い、すべての人が主に導かれることを祈らずにはいられないのです。

ご復活を祝うわたしたちは、もはや十字架につけられた主イエスを捜しません。墓が空であったように、死の世界は虚しさだけが広がっているのです。しかし、そこに留まることはないのです。「**あの方は、あなたがたより先に…行かれる**」のです。「**そこでお目にかかれる**」のです。

この世界が、世界中のすべての人が、暗闇の中から導き出され、光り輝くところへと歩み出すときまで、ご復活されたお方とお会いするときまで、わたしたちも、そう告げ続けるのです。